

氏 名 ^{やま}山 ^{なか}中 ^{いち}一 ^{ろう}郎
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学位記番号 論 文 博 第 284 号
 学位授与の日付 平 成 7 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
 学位論文題目 石 器 研 究 の ダ イ ナ ミ ズ ム

—ボルド型式学の革新のために—

論文調査委員 (主 査)
 教 授 小 野 山 節 教 授 永 田 英 正 教 授 成 田 孝 三

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、ヒトが使うことを意識して作った石器の製作技術にかんする情報を体系化することによって、石器を残したヒトの生活を復原・理解しようとするとき確実なことは何かを明らかにしようとしたものである。全体は5章からなる。

第1章は、現在石器研究に用いられる主要な二つの方法が述べられる。石器はヒトが作ったものであるとともに、ヒトが使ったものである。石器がいかにして製作されたかという情報を体系化しようとする研究を技術形態学的型式学と呼び、石器がどのように使用されたかという情報を体系化しようとする研究を機能形態学的型式学という。しかしわれわれが手にする石器資料から確実に認めることができることは、手にする石器がどのようにして作られたかということであると考え、技術形態学的型式学にしたがって研究を進める。

第2章では、1950年にフランソワ・ボルド (François Bordes) によって提唱されたこの技術形態学的型式学その後の展開と批判および反批判を詳細に検討し、論者自身の方法を提示する。それはボルドの技術形態学的型式学を基礎とし、これに属性分析の方法を導入したものである。石器資料の属性分析的研究は、技術属性を用いて検討する限りは、石器製作にかんするデータを定量的に処理して、実際になされた石器製作行為の認定の蓋然性を高めることができる。そして扱う対象を拡大することによって、年代的、地域的な特徴を把握することが可能となる。

第3章は、石器資料の属性分析的研究を進めるために、まず整備しなければならない分析対象の石器群を構成する石器資料のすべてを分類することのできる型式一覧(タイプ・リスト)を示す。石器製作工程の段階に応じて、0)石材段階、1)石核調整段階、2)剥片剥離段階、3)細部調整段階、の各段階で生じる石器資料を分離識別できる型式を定義して設定する。そして石器製作工程で一つの段階をなし、細部調整を施すときの素材を生産する剥片剥離過程の生産物が主体をなす剥片と、型式の定義が安定している彫器および搔器について属性分析を行う。

第4章は、分析属性のリストが整備された型式について実際に分析を行い、その結果を解釈したものである。剥片分析には東京都板橋区四葉地区ニ調査地と大阪市平野区长原遺跡の出土資料が選ばれる。長原遺跡の石器群の分析から、原機を持ち込んでここで割っていることなどを明かにした。このことを資料の採取地点のデータと関連させると、石器資料のでき方についての技術的解釈の情報と合せて、そうした石器製作技術が行われた「場」を遺跡空間の内に特定することができる。

彫器については新潟県北魚沼郡荒屋遺跡、搔器についてはロシア・ユディノヴァ遺跡の出土資料を取り上げる。搔器は想定される機能で実際に使用されたとすると、刃部の消耗が甚だしく、刃部が度々付け直されたと考えられる。刃を付け直す度に刃部角はその角度を大きくしていくことが認められる。一つの石器群全体の資料の分析を行う試みが、中国・水洞溝遺跡の1923年発掘資料によって行われた。搔器、削器およびその複合型式の分析の結果、さらに他の資料の分析を進めるならば、これらの石器型式の存在が東アジアの後期旧石器時代研究において極めて重要な位置を占めることになるであろうことが明かになった。

第5章は「石器研究のダイナミズム」と題して、石器研究のあり方を問題にする。19世紀にドゥ・モルチエ (G. de Mortillet) が石器研究の視点を確立してから今日に至るまでの石器研究の目的と方法を改めて振り返り、ボルド型式学の石器認識法は、ドゥ・モルチエ以来のフランス石器研究の伝統が作り上げてきた成果をボルドが集大成したものと評価する。つまりボルドは石器を識別する用語体系に系統性を与えたものであって、この用語で石器が描写される限り、多くの研究者に共通理解がもたらされている。そして石器研究の研究法は、まずあらゆる石器資料に適用できるという意味で系統性をもち、それとともにその定義を認めるとだれにでも同じことが行なえるという意味での普遍性を持つことが必要であり、もうひとつ大切なことは、その研究は実際に石器資料が扱われているという意味で実体性をもつことである。つまり石器研究にあっては、分析方法と分析結果、そしてその解釈があわせて提示される必要がある。方法の提示と分析の実践の関係を不断に維持し続けることが、石器研究の成果を高めるために重要な役割を果たすと考える。

このあり方が石器研究のダイナミズムである。

論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、ヒトが使うことを意識して作った石器の製作技術にかんする情報を体系化することによって、石器を残したヒトの生活を復原・理解しようとするとき確かなことは何かを明らかにしようとしたものである。

本論文において用いられる方法は、石器の技術形態学的型式学である。石器の使用法の情報を体系化しようとする研究を機能形態学的型式学と呼ぶと、石器に残った使用の痕跡が少ないため、石器の機能面から系統的に理解することは、現状では不可能であると論者は判断して、1950年にフランソワ・ボルド (François Bordes) によって提唱された技術形態学的型式学を用いる。しかしその方法はボルド型式学そのままではない。ボルド型式学は、提唱以来多くの研究者に採用され、時間的にも空間的にも適用範囲を拡大させて多くの成果を挙げてきたが、方法の適用の拡大に伴って多方面から批判が加えられるように

なった。論者はそれらの批判を詳細に検討し、ソンネヴィル＝ボルド (D. de Sonneville-Bordes) による反批判をもふまえた上で、ボルドの技術形態学的型式学を基礎として属性分析の方法を導入する。

そして論者は、研究法のあり方を次のように述べる。「科学である石器研究では、その研究法は、まずあらゆる石器資料に適用できるという意味での系統性をもち、それとともにその定義を認めるとだれにでも同じことがおこなえるという意味での普遍性をもつことが必要であると考え。そのうえもうひとつ大切なことは、その研究は実際に石器資料が扱われているという意味での実体性をもつことである」と。さらに実際に資料分析を進めるなかで、属性リストはたえず検討されなおされねばならないものであって、論者はこのことを「反射を受ける」と表現し、研究が進められていくとき属性リストは常に「反射を受け続ける」ものであると説く。

本論文の研究成果の第1点は、この研究方法を樹立したことである。それは同時に石器資料を取り扱うさいに取るべき独自の方法を編み出したことをも含むものである。その方法の体系は、型式リストと属性リストとして提示された。型式リストは石器製作の工程にしたがって、石材段階、石核調整段階、剥片剥離段階、細部調整段階に大別され、形状の特徴によって11種のカテゴリー・185型式に細分されている。属性リストでは、例えば剥片を分析するさいの属性として、剥片の形態8項目、剥片剥離技術17項目、剥離技術を定性的に示す剥片11項目、剥離時事故2項目、折れ面1項目、合計39項目が示されている。彫器と搔器を分析するための属性としてはそれぞれ15項目が用意される。

主な研究成果の第2点は、従来研究対象として取り上げられることがほとんどなかった微細な剥片まで採集して、これらの型式分類と属性分析を行ったことである。例えば大阪市平野区長原遺跡の4J-2調査地では、5.5 mm、2 mm、0.6 mmのメッシュで洗浄フルイにかけてサヌカイトの石器資料82,500点余りをえたが、洗浄フルイ作業によって捕集されたものは80,500点余りであった。発掘中に採集できたのは2,000点余りであるから、洗浄フルイ作業を導入する前は、この2,000点余りの石器だけで議論していたことになる。論者は、当時の石器製作法を復原するためには、この2,000点だけでなくかつては無視されたかあるいは気付かなかった80,000点を検討することがぜひ必要であると考えて、それを実行した。そしてその成果として、従来は分析のメスを加える機会の乏しかった剥片が、技術形態学にとっていかに重要な情報をもたらすかを示すことができた。打ち欠いて捨てた剥片の形から、どのような形の石器をつくらうとしていたかという問題、言い換えれば石器を作る人間の意識を復原しようという課題に迫ることができると考えるからである。

第3点。石器研究法は「あらゆる石器資料に適用できるという意味での系統性を」もつことが必要であると主張する論者が、日本以外の石器資料について具体的に型式分類と属性分類を行ったのが、ロシア・ユディノヴォ遺跡の搔器と中国・水洞溝遺跡の石器群である。その結果、ユディノヴォ遺跡の搔器では刃部再生が行われて刃が激しく段状を呈し、よく使われた状態を示すものが58.1%を占めていることが分かった。これらの搔器は、住居に獣皮を利用するための処理や骨角材の加工に大量に用いられたものと推測される。またここで分析した水洞溝遺跡の石器群は1923年に発掘された古い資料であるが、大型石器を作る剥片の剥離は、細部調整過程の最終生産物の形を意識してなされていた可能性が高いこと、石器型式として削器と搔器の割合が極めて高く、両者の複合石器もあって、西ヨーロッパの旧石器とはまったく異なっ

ていることなどが明かにされた。このことは地域的特色を理解するにも論者の方法が有効であることを示すものである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認める。1995年2月28日、調査委員3名が試験を行い、合格と認めた。